

③ ぜんそくと掃除機の排気

名古屋市に住む河出幸三さん(31)仮名は昨年、新しい掃除機を購入した。四歳の長女が「ぜんそく」と診断され、医師に「(アレルゲンである)部屋のダニやホコリを極力、取り除くように」と指示されたからだ。

「娘のために、とにかく早く、良い掃除機を買おう」と、それしか考えていませんでした」と振り返る。「排気が出ない」という

守る

売り込みにひかれて、大手メーカーの「子供の健康を守る」という趣旨のキャッチコピーの商品を買った。しかし、一カ月もたないうちに、長女はかつてない、ひどい発作を起した。

驚いたのは、会員購読している冊子の掃除機特集に目を通したときだった。河出さんの使っている製品の車輪部分から、チリを食んだ排気が出ていると指摘されていた。

「長女の発作の原因が掃除機とはかぎらないが、排気が出ないと思っていたから、娘が掃除機の後をついて歩いてもしななかった。CMをうのみにした私も悪かったが、ぜんそくは命にかかわる病気だから、性能が中途半端なら、アレルギー患者にいいような広告ほしくないほしい」と、収まらない様子だ。

冊子を作ったのは「食品と暮らしの安全基金」(東京都千代田区)。昨年春から一貫して掃除機の安全性を問題にしてきた。国内外十社十種類の掃除機に試験的にダストを吸わせ、排気に〇・三ミクロン(マイクロは百万分の一)以上のチリがどの程度含まれるかを測定器で測った。結果は機種によってゼロから二百万個以上まで差が出た。

実験室で行ったわけではないため、数値は目安に過ぎない。しかし、同基金が掃除前の室内と、掃除中の掃除機の排気口でチリの数を比較し、排気口から出る数の方が少ない掃除機を「合格」としたところ、

軽と重視…遅れる対策

「合格」は数値がゼロだったエレクトロロックス社(スウェーデン)の「オキシシエン」など数点だけだった。

実験した同基金の丸田晴江さんは「掃除機はごみを吸って部屋をきれいにするものだと思うのだが、部屋を汚すものだったことに驚いた」という。

「ぜんそくは部屋のダニやほこりが一定水準以下になれば、起きなくなる。布団やじゅうたんに掃除機をかけ、ダニの少ない環境にすることは薬に優先する治療」

国立成育医療センター研究所の斎藤博久・免疫アレルギー研究部長はこう述べて、アレルギーに関する情報を提供する生活環境研究所(千葉県習志野市)の福沢仁代表は、「吸い込む風量が多ければ、『吸い込み率』は上がる。しかし、フィルターの目を細かくすれば、風が抜けず、仕事率は落ちる。落とさないためには、(排気口以外の)風のパイパスを作るしかない」という。

住まいの気密性が高まり、ダニは増え、冷暖房が完備され、人の皮膚や気道は弱くなっている。アレルギー患者増加の背景には、家の環境変化がある」とは見逃せない。

これに対して、ある家電メーカーの広報担当者は「排気口以外から出る排気も、フィルターを通していてもアレルギーをまき散らすことにはならない」と指摘する。

しかし、アレルギー対応の点では日本の掃除機の成績は「いまひとつ」。日本の商品が指標になっている「吸い込み仕事率」に問題があるとの声もあがる。

だが、店頭やカタログでも、排気に含まれるチリやホコリが数値で示されることはほとんどなく、商品比較はできないのが実情だ。比較実験をした丸田さんは「メーカーはぜひ、本当に困っている母親や子供たちのために、いい商品を作ってほしい。私たちは消費者がそういう商品を選べるような情報を提供していきたい」と話している。



安情区(千代田区)の丸田晴江さん(左)が、掃除機の排気口から出るチリを測定している様子。測定器は「食品と暮らしの安全基金」が提供している。

(佐藤好美)